

主題科目 授業デザインフローチャート

まず、次の条件を満たしてください。

- ・キーワードを設定し、何について考えさせるのか、明確にする。
- ・キーワードを軸にして、全体の連関が見えるように授業をデザインする。
- ・授業の主題が、学生自身にかかわるものであることを理解させる。

到達目標・授業タイプの選択

到達目標	課題を発見し、解決策を提示することができる	課題解決策を提示することができる	課題を発見することができる	課題について説明することができる
授業タイプ	課題発見＋解決型 I	課題解決型 II	課題発見型 III	課題理解型 IV
必要な活動	<p>教員が、授業の主題（あるいは、その主題の一部に関わる問題や事例）について説明し、作業の手引きをする。</p> <p>学生が授業主題（あるいはその一部）に関する課題をみつけ、解決策を提示する。 (課題発見・解決ワーク)</p> <p>フィードバックを行なう。</p>	<p>教員が授業で取り上げる課題（あるいは、その一部にあたる課題）について説明し、作業の手引きをする。</p> <p>学生が提起された課題に対して解決策を提示する。 (課題解決ワーク)</p> <p>フィードバックを行なう。</p>	<p>教員が授業の主題（あるいは、その主題の一部に関わる問題や事例）について説明し、作業の手引きをする。</p> <p>学生が、授業の主題（あるいはその一部）に関して、課題を発見する。 (課題発見ワーク)</p> <p>フィードバックを行なう。</p>	<p>講義を通じて、取り上げる課題（ex. 環境問題）の、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史的経緯 ・現状 ・構造 ・事例（≒射程） ・解決策 <p>etc. について理解させる。</p>

タイプ判定するにあたって…

- ・ワークは、個人ワーク、グループワークのどちらでもかまいません。
- ・個人で書く／入力する活動を主とする場合でも、I～IIIタイプになります。
- ・授業の一部にワークを取り入れる場合でも、I～IIIのタイプになります。

課題発見・解決のワークを取り入れるにあたって…

- ・学生が自分で考えられるような工夫をしましょう。
- ・いきなり作業に入らせるのではなく、十分な作業の手引きをしましょう。
- ・作業をやらせっぱなしにせず、作業についての振り返りを行いましょう。

タイプⅣの一部に課題発見・解決のワークを組み込むとタイプⅠ～Ⅲになります。

※授業形態がⅠ、Ⅱ、Ⅲのいずれかに該当する場合は、DRI教育の拡充および成果可視化のためのD科目となります。